

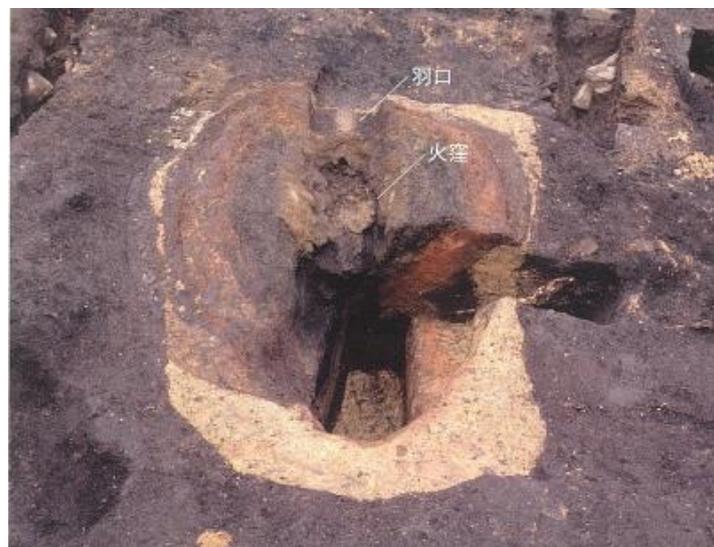
発掘が解き明した鉄づくりの秘技

獅子谷遺跡（飯南町、1998年調査） 東山信治

出雲・石見地方ではかつて鉄づくりが盛んで、国内でも屈指の生産量を誇っていました。木炭を燃やした炎で砂鉄を溶かして鉄を作り出す日本古来の製鉄方法を「たたら製鉄」といい、鉄を作った工場を「たたら」といいます。

ところが、たたらで作られた鉄の多くはそのままでは鉄製品に加工することができません。そこで鉄の不純物を取り除いたり、炭素量を下げたりして、軟らかく粘りのある地鉄じがねに加工する必要がありました。この工程を「大鍛冶」といい、その作業場を「大鍛冶場」といいます。大鍛冶場は、「左下場」と「本場」と呼ばれる2基の鍛冶炉があるのが一般的で、左下場では鉄を加熱・脱炭して左下鉄をつくり、本場では左下鉄をさらに加熱し脱炭をすすめ、鉄床かなとこの上で叩いて延べ板状の地鉄じがねに仕上げるのです。しかし、鍛冶炉の構造自体がどういったものかは、遺跡の保存状態によることもあって不明な点が多いのが現状でした。

そんな大鍛冶場の跡が飯南町の獅子谷遺跡で発見されました。私は製鉄関連遺跡の調査はこれが初めてで、経験豊富な先輩職員のアドバイスを聞きながら、春から冬にかけて悪戦苦闘して調査を進めることになりました。最終的に8基もの鍛冶炉が発見され、江戸時代の複数時期にわたり操業されたことがわかりました。最も新しい19世紀後半の大鍛冶場跡はたいへん残りが良く、左下場・本場の鍛冶炉や鉄床かなとこの跡、炭置き場、鉄を洗った水場遺構などが見つかりました。



羽口が残っている本場の鍛冶炉

鍛冶炉も奇跡的といえるくらいよく残っており、8基の鍛冶炉のうち本場の鍛冶炉1基、左下場の鍛冶炉1基には、ふいごの羽口はぐち（土製の送風管）が作業時のままの状態で見つかりました。この県内でも初めての発見に、「江戸時代の鍛冶炉がこんなにもよく残っているとは！」と驚いたことを覚えています。さらに調査を進めると、これらの羽口は本場では7°、左下場では5°ほど炉内に向かって傾斜していることもわかりました。羽口の据え付け方は鍛冶作業の出来につながるといわれており、職人たちは大変気を使ったに違いありません。

また、鍛冶炉は穴を掘りこんでから、その内側に粘土を貼るなどして、長方形のくぼみをつくっていますが、本場の方が高温で作業するため、地下構造を大きく複雑にし、炉の保温性を上げていたことがわかりました。中には鍛冶炉の下に石組みの排水溝を設けていたものもあり、こうした例も他の大鍛冶場では見つかっていません。

職人たちにとっては、こうした大鍛冶の技術は他人には知られたくない、いわば企業秘密のようなものだったと思われそうですが、その秘技を発掘調査によって解き明かすことができました。そうであるならば、冬場に雪の積もるなか、遺跡の上にビニールのテントをたてて寒さに震えながら調査したことも報われるといえるでしょう。

（島根県埋蔵文化財調査センター調査第二課長）



獅子谷遺跡の大鍛冶場跡（19世紀後半）